2Ep-16

大学における被服に関する研究の日米比較
－最近10年間の年次大会における研究発表の内容分析－

鳴門教育大院　○橋本紫穏子　　鳴門教育大　藤原康晴

＜目的＞経済や学問のグローバル化が進んでいる。被服の分野においても、テキスタイル、アパレルの生産やマーケティングは既にグローバルに行われており、被服学研究も部分的には国際的な活動がなされている。しかし、家政学の被服学分野の国際交流は、十分とはいえないところがあり、家政学会においては、国際交流委員会を中心としてこれを促進するための活動がなされている。被服学における国際交流はいろいろの分野で行い得るが、研究という視点から国際交流を図るとき、まずそれぞれの国における研究内容を把握しておく必要があり、前報に引き続き本報では、アメリカ（米）の大学における被服学の研究内容を日本のそれと比較検討した。

＜方法＞過去10年間の家政学会年次大会要旨集（日本）と、International Textile and Apparel Association（旧名ACPTC）Proceedings（米）を資料として用い、被服学研究を14領域に分類して比較した。

＜結果＞各年度の総発表件数は、日本はここ10年間あまり変化してない（平均159.5件/年）が、米は漸増（177件/1991）している。これらの発表件数を研究領域別に日米比較した結果、日本での発表件数が多く、米で少ない研究領域は「構成」、「材料」などであり、逆に米での発表件数が多く、日本で少ない研究領域は「被服教育」、「販売」などであった。米における「被服教育」に分類される研究は全研究数の約25％を占め、全領域の中で最も多い。この「被服教育」に分類された研究内容をさらに詳しく分析した結果、「コンピュータ教材」「販売」「カリキュラム」などに関する研究が多いことがわかった。